
太王四神記 サリヤン×子キハ小説 『新・いつか捧げる命』

るき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太王四神記 サリヤン×子キハ小説 『新・いつか捧げる命』

【Nコード】

N4170I

【作者名】 るき

【あらすじ】

大長老からキハの世話を任されたサリヤン。左目を失明した状態での訓練中に怪我をし、その日の夜、キハにその怪我の事を聞かれる。組織の人間として接していたサリヤンだったが？……………+「人物紹介」つき。

(前書き)

〓〓「新・いつか捧げる命」の登場人物紹介〓〓

【サリヤン】……………本作小説の主人公。

年齢不詳、推定15歳。チン城攻めで左目を失明。火天会戦闘部隊・隊長、新米。大長老の側近、及び、キハの側近。

【キハ】

5歳。虎族の火の巫女・カジンおよび朱雀の転生。火天会に誘拐され、5歳より前の記憶がない。

【 アブルランサ近郊の森の中 】

サリヤンは刀を構え、瞬き一つせず、精神を研ぎ澄ませる。

風が止み

全てのものが静止した。

その時。

斜め前方の木々の一部が微かに揺れ、その瞬間に手裏剣が飛んで来た。

サリヤンは軽い身のこなしで避け、だが、これを合図に手裏剣は四方八方と次々に飛んで来る。

瞬時に身体を移動させ、避けては時折構えた刀で手裏剣を払い落とす。

1 本目 2 本目 3 本目 4 本目 5 本目
..... 10 本目、

その場でしのぐのに限界がき、避けやすい位置へと走る。
走りながらも手裏剣は容赦なく飛んで来る。

1 1 本目 1 2 本目 1 3 本目
..... 20 本目
..... 30 本目
..... 39 本目、

息が上がる。

避ける過程で手の甲を木に強く打ち付け、激痛が走った。

そして最後の1本。

後方から気配がし、振り向く。

瞳が飛んで来る手裏剣をハッキリと捕らえ、それを刀で払い落とそうとした。

が。

切っ先が数センチずれ、刀は獲物を捕らえる事が出来なかった。手裏剣はサリヤンの顔の横を通り過ぎて後方の木に突き刺さる。

役目を終えても尚、血を欲するかのように刃を輝かせている手裏剣は、サリヤンに置き土産をしていた。

サリヤンの右頬は深く切れていた。

傷口から赤い血が流れ落ちる。

(……………やはり、距離感がつかめない)

空いていた手で失明した左目を覆った。

完全に避ける事が出来たのは数本のみ。

サリヤンの身体の至るところに傷がつき、服は裂け、血が滲んでいた。

火天会の部下・数十名に頼んでの訓練だった。

あれはキハがアブルランサに来て初日の夜の事だった。

キハを寝台に寝かせ、眠りを妨げぬよう小さな明かりを灯して仕事をしていた。

しばらくして、ふとキハに目を移すとすでに眠ったと思っていたキハは目を開け、ぼんやりと天井を眺めていた。

その様子をしばらく見ていたがキハが眠る気配はない。

どうやら布団に入ってから一睡もしていないようだった。サリヤンは手にしていた筆を置き、キ八に歩み寄った。

「いかなさいました、キ八様。眠れませんか？」

「……………」

キ八は視線を天井からサリヤンに移し、布団から手を出してサリヤンの服の袖を掴んだ。

「……………目を閉じたら真っ暗で……………、こわい……………」

キ八の声は震え、捨てられた子猫のようだった。

サリヤンはちらりと机の上に山積みになった書類を見る。前の隊長が朱雀の神器の入手の際に出向いた地で戦死し、副隊長をしていたサリヤンが隊長に就任する事となった。副隊長を置くかどうかは隊長の自由なので、自分に相応しい右腕となるべき実力を持った者がいなかったサリヤンは副隊長を置かなかった。

副隊長の頃から隊長の補佐をしていたので要領は理解したつもりでいたのだが。

いざそれを一人でやろうとすると中々はかどらないでいた。机にあるそれは明日の朝までに片付けなければならない仕事だったのだ。

だが、キ八の手はサリヤンの服の袖を掴んだまま一向に離そうとしなかった。

サリヤンはもう片方の手で袖を掴んでいるキ八の手を包み、寝台の脇に腰掛けた。

「では、異国の物語でもお聞かせいたしましょう。とても楽しくて、目を閉じても怖くないですよ」

「……………本当に？」

「はい。キ八様が眠るのが先か、私が話し終えるのが先か、力比べとしましょう」

「うんっ！……！」

キ八の表情はパアッと明るくなり、物語を聞くキ八の瞳はキラキラと輝いていた。

大長老の命^{めい}でキ八の身の周り世話や教育を任されて、早、一週間で経った。

【アブルランサ：サリヤン書斎兼寝室】

同じ布団に入りキ八の横で物語を聞かせて寝かしつけるのがサリヤンの日課となっていた。

サリヤンはどんなに忙しくてもキ八の為に時間を空けた。

そして今宵も物語を語っていた。

だが今日のキ八は様子が少し違った。

相槌をうつものの、どこか上の空だった。

ある一点を見つめ。

「……………キ八様？いかなさいました」

キ八はサリヤンの問いに答えないうまま無言でサリヤンの顔に手を伸ばす。

キ八の手がそつと右頬の傷に触れた。

「血がついてる……。痛い……。……?」

「大丈夫です。痛くはありません」

心配そうに見つめるキ八を安心させるため、優しく笑って語りかけた。

怪我をする事に無頓着だったサリヤンは傷の手当てをしなかった。顔を洗った時に血を洗い流したつもりだったが、完全に止まっていなかった血は傷口で赤い色を残したまま固まっていた。幼いキ八から見れば相当痛そうに見えたのだろう。

「心配なさらずとも血は止まっています。ご安心を」

「ちゃんと傷の手当てをしたの?」

「はい」

「うそだよ、してない……。……」

傷の様子から見て手当てをしていないのは明らかだった。

キ八は起き上がり寝台から下りて、部屋の戸棚へとトタトタと走った。

そして何かを手に持ってまたトタトタと走り、寝台の傍に立った。

その手には怪我の治療箱があった。

治療箱を床に置いたキ八はしゃがんで箱の中を探る。

その様子を静かに見つめていたサリヤンは起き上がった。

「キ八様、お心遣いありがとうございます。でもこの程度の怪我、手当てなどしなくてもその内治り、」

「だめっ!」

「キ八様がそのような事をしなくてもよいのです。キ八様が眠った後に自分でしますので、どうかお休みに」
「今しないとダメなの！！バイ菌が入ったら……っ……っ……、サリヤンが死んじゃう……っ……っ……！！」

キ八の目は真剣で。
その目につつすら涙を潤ませていた。

(……………)
これ以上拒んだら本当に泣かせてしまうと思ったサリヤンは大人しくキ八に従うことにした。

「申し訳ございません。ではお言葉に甘えて。お願いします、キ八様」

サリヤンはキ八が手当てしやすいように身体をキ八の方に向けた。
キ八は布に薬をつけ、それを右頬の傷口に当てて、そっと塗った。

ズキッと痛みが走る。

「……………痛くない？しみる？」
「大丈夫です」

頬の傷は、自分が思っていたより深かった。
布には血が少しついていていた。

キ八は慣れた手つきで傷の手当てをした。

一体どこで覚えたのか。

キ八の記憶は大長老の手によって消され、キ八に誘拐される以前の記憶はないはず。

(…………不思議だ。いつの日か
げるような気がする……………)

このお方に自分の命を捧

失明した左目がキハの姿を優しく映していた。

「よい夢を、キハ様

……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4170i/>

太王四神記 サリャン×子キ八小説 『新・いつか捧げる命』

2010年10月11日04時48分発行